

7 さが文化 2010年(平成22年)8月28日(土曜日)

県内文化

美術

野中 耕介

に、生前のかれを知る人々 出会いと交流の中で方向づ
と「家族により、かれの美 けられていったことが分か
術教師として、よき家庭人 たる。幸は、おそらく生前も、さ
としての優しき心と、美へ 技法的にはアカデミック
の繊細な感受性が切々と綴 なた塑像から石彫へと軸足を
られている。こうして生の 移し、よりプリミティブな
証しを残すことができた 表現へと変化する。だがそ
り、角町泰隆彫刻遺作展 (残してもらえた)、角町の れは、元来あまり器用でな
実行委員会編、平成15年出 人間としての「幸福」をしみ い印象の角町の手技を、美
版)が私の元に送られてき じみと思つ。 術的な洗練からさらに遠ざ
た。出版後ずいぶん時を経 けることにもなったように
てのプレゼントで 角町は佐賀大学教育学部

ある美術教師―作家の生涯

あつたが、実は、私
はこの遺作集のこ

とがずっと気になつてい
た。なぜなら当時、Mさんか

ら遺作集への寄稿を求めら
れたものの、私自身の問題

―作家と作品への理解不足
―からお断りしたことが、

今も心に引っかかっている
からである。

遺作集は美しく、作り手
の思いが存分に込められた

見事な出来であった。そこ
には角町の代表作ととも

中学美術課程を卒業し、故
郷―地方の美術教師をつと
めながら県内の展覧会に出
品、また全国公募展にも挑
戦した。その生涯は同課程
が創設以来育み続けた地
方の美術教育者―作家のひ
とつの典型である。残され
た角町の作品と活動歴を見
れば、かれの造形は美術教
育者としての自覚を基盤と
し、それを通して人々との
思いが存分に込められた
見事な出来であった。そこ
には角町の代表作ととも

多くの教育系美術修学生
と同様に、角町もまた「二足
の草鞋」―教育者と作家、そ
の双方の自意識の葛藤を心
底に感じていたはずであ
る。その内実がどのような
ものだったか、今は知る由
もないが、もし角町が胸中
に教育者とは離れた作家と
しての自意識を、私たちが
思う以上に抱いていたとし

たならば、それは本来つな
がっているものだと思つ
が、時としてそれらは切り
離され、造形の評価、批評は
置き去りにされる。これこ

そが、作家
がいわゆる
「地方に埋
もれる」という現象の正体
のように、私には思われて
ならないのである。

だからといって、角町の
美術教育者としての業績と
精神の遺産は、いささかも
その価値を減じることはな
い。しかし一方で、角町の生
涯は地方の美術の質的問題
と、評価、批評の問題につい
ても考えさせるのである。

(県立美術館学芸員)

文化時評

2010